

聖化

日本聖化交友会機関誌

No. 7

'89. 3. 1



回心 畑野 基

伝道と完全への転機

昨年、ジョン・ウエスレー回心（一七三八年五月二四日）二五〇周年に当り、世界各地でその記念行事が行われたとの事です。

ウエスレーは「心あやしくも燃える」経験が転機として変わりました。回心の翌朝、目をさました瞬間「イエスよ、主よ」との言葉が、その心にも、口にも満ち溢れるのを覚えしました。そして自分の目がイエスを見つめ、魂がイエスに仕えたいと願っている事に気付きました。彼は、その経験が主イエスを信じる信仰によって起ったことを知り、「信仰による救い」を情熱を傾けて語り始めました。彼は英国教会の教職でしたから、同教会でこの事を説教しました。がその確信に満ちた説教は逆に多く

の反発を招き、教会は彼に対して罪を閉してしまいました。

この時、ホイットフィールドのすめに従い、教会が受け入れられないのであれば、聞く人のいる所で語るのだとして、社会や教会に忘れられていた人びとに向って、野外で叫び始めました。この野外説教は、彼の生活のテンポとリズムを変え、生活のすべてが伝道を中心として展開される事となりました。聖霊による的確な回心で、どちらかというの内省的自己分析的であった性格が変わり、福音のためには何でもするものとなりました。

その結果生れた確信は、
1、すべての人は救われる。神の恵は、イエス・キリストによってす

べての人に自由に与えられる。救いは、自ら信じようとしぬい者を除いて、すべての人のために備えられている。

2、すべての人は、救われていることを確信することが出来る。聖書には、「み霊みずから、わたしたちの霊と共に、わたしたちが神の子であることをあかしして下さる。」（ロマ八・16）

3、すべての人は、キリスト者の完全に達することができる。（ここにいう完全とは、回心後、回心とは別の霊的経験であり、聖化交友会はその宣証のため立てられています。今は割愛します）この経験によって、人はキリストを、すべての思い、言葉、行動を支配されるキリストを、預言者、祭司、王として受け入れ、全力をあげて神と人とを愛しようとし、そのあかしに生きるものとされます。

今、日本に求められているのは、的確な回心からスタートし、完全に達し、一すじに伝道に生きる器です。

キリストに属する クリスチャン

■小林和夫■



「キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまつたのである。」

「もし、キリストの霊をもたない人がいるなら、その人はキリストのものではない。」
— ロマ 8・8 —

聖化交友会の働きが進められていることは日本の福音的な教会にとつての大きな祝福となっています。聖化を信じるお互いが、もつと強力に、広く、力強くこのメッセージを宣証してゆくことは、私共に課せられた重大な使命であると思います。この事は、聖化を信ずるクリスチ

ヤンが恵みによって徹底的にキリストのものになるといふ事と、成熟した神の子として成長する事にかかつていふと思ひます。

元々、クリスチャン（クリステイアヌス）とは、未信者から見た「キリストのもの」という呼び名でありました。（使徒 11・26）又、パウロは、「あなたが

たは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは代価を払って買ひ取られた神のものである。」と言つています。（第 1 コリ 6・19、20）これはキリスト者の当然の姿でありま

すが、しかし恵みによる明確な経験なしには、この当然の姿にあることも、それを継続することもできないと思ひます。ウエ

スレーは、クリスチャンの中にも、「オールモスト・クリスチャン」や「セミ・クリスチャン」という全くキリストのものに成りきつていないクリスチャンや、半分だけキリストのものになつてゐるクリスチャンがあると指摘しています。私たちの言う聖化とは、この点に於いて、トータル（全的）にキリストのものに成り切ることである、と言うことができますと思ひます。

パウロは、前掲の二つの聖句に於いて、「キリストに属する者」とは、第一に、「肉に死んだ者」、第二に、「キリストの御霊の内住している者」と説明しています。

以下、この二点について注目してみましよう。

一、肉に死んだ キリストのもの

コリント第 1 の三章には、「霊に属する」成熟したクリスチャンと、「肉に属する」未成長のクリスチャンという、はっきりとした区別が信者の中にあると

してあります。そして、この肉のことをガラテヤ書には、「肉の欲するところは御霊に反し……こうして二つのものは互いに相逆らい、その結果、あなたが

たは自分でしようと思ふことをすることができないようになる。」（5・17）と、その真相を指摘しています。そして、この肉の働きが明らかになつてくると、「肉の實」が結ばれると

してあります。（5・19、21）

ところが、この肉は、厄介な人間の力ではどうにも処理することのできないものです。これがクリスチャンの成熟をダメにしてしまうものなのです。ですから、パウロは、聖霊による深い認罪と自己の真相の確認とを経て、「自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまつたのである。」（5・24）と、すでに私の肉の死んで下さったイエス・キリストの十字架に合体されたことを、信仰をもって受くべきであると主張して

います。（ロマ 6・6、ガラ 2・20）これによつてだけ、クリスチャンは、「肉に属する者」から、「霊に属する」キリストのものとなる基盤を得ることができま

す。

二、御霊の内住による キリストのもの

この消極面でありませぬ。その積極面は、キリストの内住によつて、「キリストのもの」となるといふことです。このキリストの内住は、よく口にされることですが、決して、抽象的、観念的なことではありませぬ。霊的なことですが、現実です。信仰により、御霊が各自の魂の中にもたらす現実です。パウロは、「キリストがわたしの内に生きておられる、という事は、具体的に、私を愛し、私の為に御自身を献げられた神の御子を信じる信仰によつて生きる」こと、すなわち、キリストの愛と真実によつて生かされているといふ生の自覚の経験であると言つています。これは福音の真髄であります。かくして、ウエスレーの言う、オールモスト・クリスチャンや、セミ・クリスチャンから脱して、成熟せるクリスチャンの生涯が、形造られてゆきます。



神の目的の実現

(聖書エペソ一・一―十四)



クリスチャンの生きる目的は何なのだろうか。使徒パウロは、私たちはその目的を知ることができ、その目的を実現する事ができることを示している。

第一は、神の栄光をほめたたえる者となるためであり(十二節)。第二は、御前で聖く傷のないものとして愛のうちに歩むものとなるために選ばれている事である(四節)。

聖書は、神の御前における人間関係における聖さという事を言っている。ここにおいて二つの質問がなされている。①私たちは誰に所属しているものか。②どのような者たちであるか。

一、所属、聖きは誰に属しているのか、どのようなグループに属してい

るのかによって知ることができる。自分が生活を共にし、心から愛する事のできる人がどのような人かと言う性格によって知られるのである。

また、私たちは誰に属しているのか報告の義務がある。神は私たちの頭脳、時間、体を、私たちに財産(リソース)として与えて下さる。聖い人たちは、自分の持っているリソース全てが神に属している事を知っている。誰に属する者かを知るときに神は私たちの持っているリソース全てを毎朝神さまにささげてその一日を始めその姿で一日を過ごす事ができるように導いて下さる。

聖さとは、誰に属しているかに答える事であり、私はどのような存在なのであるか、どのような性質を持

っているものなのであるかに答える事なのである。

二、聖さ

世からの聖別(エペソ四・十七)。世的な生活から離れる事を示している。世に妥協しない事である。

聖く傷のないものとなるとは、他人との人間関係の中で愛を持って生きる事であり、他の人に寄生するような生き方ではなく、寄与する生き方に変っていく事である。(エペソ四・二五―二八)。

三、自己、あるいはこの世を礼拝する事を乗り越え、神の目的のために生きるという事のために神のして下さる事が五つある。

1、キリストによりあがなって下さる。(七節)

絶望的に負債をかかえ、支払う能力のない者の為はその負債を全部支払ってくれ自由にしてくれたようなものである。私たちは、この事を自分の回心経験としてのみ考えやすい。しかし、神の目的、召しにかなって生きるためにはどのようにしたらよいのかと言う意味において示していただく事があるのである。

2、神の子として下さる。(五節)

奴隷として仕えるものを主人が子供としてくれ、遺産を相続するものとなり、その時から、恵によって子どもとしての生活を楽しむ事ができるのである。

3、選んで下さる。(十一節)

神が私たちを選んで下さったのは、神の目的、意図のために私たちを用

いて下さるためである。それは私たちの必要の告白になる。イスラエルの民がエジプトから救出されたとき神に対してその事を告白するとき常に自分たちがエジプトに於て束縛され奴隷であったそのような必要を持った者であった事の必要の告白であった。神が成してくださった事それは私たちの持つている必要を示すものである。アルコール中毒者がアルコールに中毒になつていようように私たちも自分自身に、又人の考えに中毒になつていよう事があるのです。自分の必要を認め神様ご自身に自分の生活の中に入つて働いて下さる事を私たちの必要として申し上げるとき、私たちは、その事から開放されて生

きる事ができる。それは、神が私たちに目的を持つていて下さるといふだけではなく、神様が私たちの内に働いて下さるといふ事である。

4、証印を押して下さる。(十二・十四節)

証印が押されている、それは受け継ぐべき遺産それを全部与えられていふ事の保証である。証印それは、誰の所有であるかを示すものであり私たちが神の所有物になつていようという印である。キリストご自身の約束の聖霊によつて証印を押されたらそれは神の所有になつていようという事である。愛、喜び、平安、このようなものが実として私たちの内に出てくるならば、私たちが誰に所有さ

れているものが示されている。人に対して自分自身を与えて生きる者になつたと言ふ事である。神が聖霊によつて成して下さる事の故に信じる事ができるのである。

5、情況の中における働き(十一節)

私たちは御心によりご計画を実現される方の目的に従つて生かされていふのである。実現されるとは、神が私たちの内に働いて「実現される」と言ふ事である。怒る事を捨て、私たちの持つてゐるものを全て神様にお獻げして生きる。そのような事ができるだろうかと思つてしまふかもしれないが、神が御自身の目的に従つて、私たちの内に働いて下さるから、それができると言ふ約束が与えられて

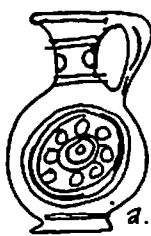
いる。自分を守る事を止めてしまふ、どれだけの犠牲を払わなければならぬか数える必要もない、全て獻げればよいのである。使徒パウロは、私たちは愛を持つて神さまの前で聖く傷のないものとなる、と言ふ目的のために生きる事ができる。そして

人との愛の關係の中に生きる事ができると言つていふ。神ご自身にお獻げするならば神ご自身がその目的を私たちの人生の中にあつて実行して下さる。神はこの日本でそのよう人物を起こしたく願つていらつしやる。私たち一人一人の人生において、そうなさつてくださるよう。

(文責・石田敏則)

第二夜メッセージ

偽りを捨て、眞実を語りなさい



聖書 エペソ人への手紙四章一七

節から五章二節。

第一夜で扱つたエペソ書一章四節

には、神が私達のうちになされた御

業の目的が記されている。四章二五

節からのところには、私達がホーリ

ネスをどの様に生きるかという、そ

の内容の具体的な事例が列挙されて

いる。パウロは冒頭で、「偽りを捨

て、眞実を語るように」命じている。

彼は、聖い生活が抽象的な事柄に過ぎないならば、それは虚しいことで

あると知っていた。パウロにとつて聖いとは、毎日の実際の生活の中で、実現されて行く真の聖さであった。一、偽りを捨てるとは、どういう事であろうか。ちようどゴミを捨てるように、「偽り」という生き方を捨てることである。

「偽りを捨てる」ことの、まず積極面を考えてみよう。第一に、それはイエス・キリストを私達の救い主、王としてあがめることである。三章の終わりには、私達の心の中にキリストに基礎をおいた家を建てるように語られている。私達の人生の全ての部屋に、すなわち言葉、思い、生活のわずかな部分も、ほんの一秒すらも、そこに住まれるお方として、主を迎えるのである。パウロがこのように具体的な事柄を見せるのは、私達の心の中にいったいどのような原則が働いているかを示すためである。私達の生涯は神に献げられたものか、悪魔に隷属するものか、そのどちらかとなる。中立的な立場はない。主に全てを献げ、神の所有とされる時は、すなわち悪を拒絶し、異

教的な生き方を捨てる事を意味する。

第二に、「偽りを捨てる」とは、偽りの実態を知ることである。パウロが言うように「偽り」はきわめて巧妙な、複雑な仮面をかぶっている。

「嘘をつく」といった単純なものでは決してない。語ることも、

「みんなが……」と一般化、普遍化しようとする巧みな偽りの仮面が現われて来る。「いつでもこうなんだから」と誇張、誇大化したり、沈黙によつて立場をあいまいにしたり、「あなたの動機は……」と勘ぐったり、遠回りに皮肉を言ったりと、仮面をかぶった偽りが横行するのである。言葉だけでなく、いつの間にか服装や体型、態度など外見が、うちに何があるかよりも重く見られてしまう。しかし、私達は外見よりも、内側が大切だといわれる世界に住んでいるのである。世の人々が考えるように考え、世の人々が語るように語り、行動するように行動することから、私達は主にあつて変えられなければならない。

二、これまでは「偽りを捨てる」こ

とを見てきたが、次に「真実を語る」ことを考えて行きたい。

真実を語るにはどうしたら良いのであるうか。まず第一に、相手との良いコミュニケーション、意志の疎通を良くする技術を知らなければならぬ。しばしば、この技術を心得ていないゆえに偽りを語ってしまう。何よりも自分が感じ、考えたことを率直に、正確に言うことである。誇張したり、相手を詮索したりすることをやめよう。

しかし、ここで扱われているのは技術以上の事であつて、霊的、倫理的な事柄である。実際に語るときに、真理を語っているかが尋ねられている。イエス・キリストにあつて語るとは、愛を持って、主へのふさわしさを語ることの意味する。

かつてアメリカを揺るがしたウォーターゲート事件の中心人物の一人にチャールズ・コールソンがいた。彼の経験した劇的な回心きっかけは、ボストンの実業家であつたトム・フリップスの証詞に触れたことによる。コールソンに尋ねられたとき、

フィリップスは彼の心の真実を率直に披瀝したのである。真実、真理が語られた時に、コールソンの心の中に新しい生命、希望が生まれ始めた。さて、「偽りを捨て、真実を語る」私達の心の底になされなければならぬ事は何だろうか。

まず、私達が自我を全て神に献げ切り、自分自身を人々に与えるという出来事が心のうちに起こらなければならない。パウロにとつて偽りを捨てなければならない理由は、それが悪であるというだけでなく、お互いがお互いの一部であるという理由からであつた。自分が良く見られるようにでなく、神の栄光、神への最善が動機となるのである。私達に向かつてパウロが語る具体的な問題提起は、自己中心的な自らの実態に直面させ、仮面をかぶった偽りに気づかせるものである。私達は主の前にひざまづいて折り、主に献げ切った者、きよめられた者とされたい。偽りが捨てられ、真実が語られ始めるとき、主の力が私達のうちに働く。

伝統の核心

インマヌエル高津教会 藤本 満

著名な教会史家のJ・ペリカ

ンが、次のように伝統を定義しているのは興味深い。「伝統とは、いまでは死んでいる人々の生きた信仰である。伝統主義とは、いま生きている人々の死んだ信仰である。」(The Vindication of Tradition p.65) 伝統が過去から受け継がれるべき資産であることには違いない。そして、それが過去の遺産である限り、どこかで形骸化した伝統主義に成り下がってしまう不安は、必然的につきまともってくる。

果して、▼急速に価値観の変わる社会で、▼世代交代の激しい変わり目に、▼統一された組織が不可能となってきた時代で、教会は、前世代の信仰を、最終的には初代教会の信仰を正しく継承しているだろうか。われわれの信仰は、聖化の信仰を、一八世紀のウエスレーを正しく捕らえているだろうか。そんなことは所詮不可能だ、

と思わず目を伏せてしまう。

しかし、本当にそうだろうか。ここで、復活した生けるキリストこそが伝統の中心であること、を再認識したい。キリスト教も、

仏教やイスラム教と同様に、歴史に実在した人物によって創始された。ところが、キリスト教が他の宗教と異なる点は、創始者が教えや共同体を創設して、後生に送り出したというのではなく、創始者自身が、今もなお共同体の中心であり続け、なお

も羊飼いとて共同体を指導し、やがてそれを完成に導くということである。(ヘブル二二・二二)となれば、伝統を受け継いでいくことは、たんに過去の信仰の所産を継承することではなく、本質的には復活した生けるキリストをいまに宿していくことを意味する。

ウエスレーが教会史におけるメソジストの位置づけを考えたとき、明らかに上述のような伝統意識があった。福音の伝統は、教会歴史の中で絶えることなく息づいてきた。それは、弟子たちの人生に、初代クリスチャンの中に、デイ・レンティ(Dear Renty)やロペズ(Gregory Lopez)

といったカトリックの聖徒の中に、そしていまメソジストの中に具現されている、とウエスレーは確信した。

キリストに捕らえられたこれらの人々は、自己を捨て、主の霊がうちに受肉する。彼らを通して、キリストの世に対する愛が自然に流れ、彼らの生涯は、無心に神の国のために用いられる。その清楚で純潔な生活様式は、なんの奢りもなく、贅沢で自己中心的な世の生活に対する挑戦となる。その現実があれば、時代や場所を問わず、使徒継承はなされていくとウエスレーは確信していた。

行動様式や教理体系の受け売りでなく、聖化の体験そのものが生活の中で実際に起こっているなら、受け継ぐことを許された資産は、「朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない。」(Iペテロー・三・三四)もつとも、表層的な行動様式や教理体系が意外に難く伝承されるのに対し、聖霊の体験の方はそうはいかないことは、心しておくべき現実かも知れない。

総務リポート

◆機関誌、第七号をお届けできますことを感謝しますとともに、発行が遅れましたことを深くお詫びいたします。昨年度は、福岡、岡山、札幌、旭川、名古屋の各地区において、聖化大会または懇談会を開催できました。各地区の諸先生がたの強力なご支援により、企画が実現しましたことを、厚く御礼申し上げます。

◆今年度も、札幌、旭川、仙台、岡山、熊本、名古屋と、各地区において聖化大会を開催する予定です。

◆また、十月二十三日、二十四日の両日には、第四回聖化大会が東京で開催されます。ウエスレーの「完全論」における組織神学の分野で知られている、趙博士(Dr. John Chungnam Cho)を韓国よりお迎えします。ご期待をお願いします。

日本聖化交友会(JHA)

第4回 聖化大会

- 10月23日、24日(月・火) 東京 名古屋
- 10月26日(木) 大阪
- 10月27日(金)

* J. ウエスレーに学ぶ会
講師 John C. Cho 博士 他

●各地区聖化大会

- 仙台大会 6月9日(金)
- 岡山大会 6月28日(水)
- 札幌大会 8月21日(月)
- 旭川大会 8月22日(火)
- 熊本大会 11月28日(火)

●お祈りください。 ●ご参加ください。